



▲会場となったパトール東京。

## 「CK.Party 2022」に参加して 「一生使える」補綴装置としてのコバルトコーヌスを考える

石井 彩瑛（医療法人社団正匡会 木村歯科医院／歯科衛生士）

去る2022年11月17日（木）、パトール東京（東京都新宿区）にて「CK.Party 2022」講演会が開催された。2020年以降、新型コロナウイルスの影響で延期が続き、2年越しによる念願の開催となった。

本会を主催したCK.Partyはコバルトコーヌス（コバルトクロム合金を用いたコーヌスクローネ）の臨床応用を探求するメンバーにより構成されるスタディグループであり、コバルトコーヌスを始めとする歯科臨床のさまざまな情報交換、各種論文の執筆や『補綴臨床別冊／コバルトコーヌス完全読本（基礎編および臨床編）』等の書籍発刊、ホームページを活用しての情報開示などを積極的に行っている。また、年1回の学術大会を開催し、メンバー間およびそのスタッフを交えた講演会による情報の共有と、懇親会による親睦推進を図る取り組みを継続している。そして今回、木村 匡司大会長（医療法人社団正匡会 木村歯科医院）、青木 学CK.P会長（ウェル西新宿デンタルクリニック）主導のもと、約70名の歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士らが集まり、コバルトコーヌスの臨床応用について議論したので、以下に報告する。

### ■第一部 学術講演会

#### 「超高齢社会における補綴臨床の選択」丹谷 聖一氏（アス歯科クリニック）

これからの超高齢社会に向けて、いずれ訪れるであろう高齢者歯科における問題をコバルトコーヌスの症例を数症例供覧しながら説明した。簡潔にその問題点をまとめると「減少した支台歯数からくる複雑な設計の必要性」「補綴処置後の口腔内安定保持の困難性」「メンテナンスの問題」等への対応である。

多くの歯牙を失った欠損部への対応としてインプラントという選択肢もあるが、リスクを考え全ての患者にそれが適用できるわけではなく、部分床義歯の併用を考えねばならないケースも多く存在する。すると当然、上記のような問題点を患者・術者共に保有し続けることになり、つまりは大きな不安を常に抱き続けることになってしまう。これを踏まえ、コバルトコーヌスの可能性として、取り外しができるため設計変更が可能、修理が確実、清掃性の飛躍的な向上が期待でき、コバルトクロムという硬い金属による強靱な補綴装置の製作においてさまざまな利点等が期待できることを述べられた。

筆者も実際にメンテナンスで診ている中で感じているが、コバルトコーヌスは清掃性も高く、実際に抜歯による確実な設計変更も目の当たりにしてきた。その率直な感想を言えば「一生使える補綴装置なのではないか」ということである。「一生使える」というのは患者全てが抱く夢でもあろう。患者との信頼関係を構築して、コバルトコーヌスの可能性により超高齢社会を素晴らしいものにし、「歯は前向きな人生を創る」を胸に丹谷氏は日々の診療に励んでいると感じられた。



▲懇親会後の集合写真。